浜松医科大学開学四十周年記念誌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 開学四十周年記念誌編集専門委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2800

6. 附属病院

(1) 附属病院通史

開学以来の通史は10年毎に記念誌に記載されているで，開学30周年記念誌が刊行された平成16年以降の10年間の附属病院の沿革について記したい（表1）。平成16年は本学が国立大学法人として新たにスタートを切る節目の年となったが，これを機に本格的に動き出した病院再整備計画は平成18年に認可を受け，平成21年に新病棟竣工，平成25年には外来棟改修工事が完了した。この病院再整備を軸とし，化学療法部や外来化学療法センター，新生児強化治療室（GCU），腫瘍センター，緩和ケアチームなどが新たに設置された。さらに，開放型病院の承認や医療安全の向上を図るために医療安全管理室，感染対策室を設けるなど，良質で安全な医療を提供するための各種環境整備と，診療科の枠を超えた病院一丸となるチーム医療への取り組みが進められた。各論については，各診療科，部門のページに述べられているので，割愛する。

また，平成16年に日本医療機能評価機構による認定を取得し，平成19年には地域がん連携拠点病院に指定された。平成16年に導入された新たな卒後臨床研修制度にあわせ臨床研修センターが設置され，附属病院としての初期研修システムが整備された。

表1　開学30周年以降の病院の沿革

平成16年	国立大学法人浜松医科大学発足
	日本医療機能評価機構認定取得
	臨床研修センター設置
	医療安全管理室設置
	ME機器センター設置
平成17年	開放型病院の承認
	化学療法部設置
	外来化学療法センター設置
	新生児強化治療室（GCU）設置
平成18年	腫瘍センター設置
	緩和ケアチーム設置
	セカンドオピニオン外来開始
平成19年	形成外科設置
	地域がん連携拠点病院に指定
	医学部附属病院開院30周年式典
平成21年	新病棟竣工
平成23年	外来棟改修工事着工
	PETセンターの竣工
平成25年	外来棟改修工事完成
	病院再整備完成記念式典
30周年より40周年までの歴代病院長	
平成16年4月－平成22年3月	中村　達
平成22年4月－平成26年3月	瀧川雅浩
平成26年4月－	今野弘之

病院再整備計画はその皮切りとして平成19年1月に新病棟の建設が着工されたが，本計画では7つの主眼（災害に強い病院，高度先進医療の提供，患者アメニティの充実，優れた医療人の育成，既存施設の有効利用，地域医療の中核としての役割，健全な病院経営）が掲げられた。これは，ソフト（運営）とハード（施設）の両面から，医療を取り巻く様々な変化に対して柔軟に対応していける「50年先を見据えた病院づくり」を目指したものである。平成21年に新病棟，平成23年にPETセンターが竣工し，平成23年に始まった外来棟改修工事も平成25年7月に完了した。構想から14年，認可から7年を掛けて行われてきた再整備も無事に終了したこととなる。医術を実践的に訓練できるシミュレーションセンターの設置や今後特に重要とされる光学医療等の診療部門の拡充，救急部の機能強化，医療福祉支援センターのサービス向上なども図られ，今後，地域中核病院としての病院機能が強化・充実したことにより，更なる地域医療への貢献がますます求められることになるであろう。

工事期間中には多くの患者さんにご不自由をお掛けしたが，エントランスホールの改修，外来待合スペースの拡充などによるプライバシーへの配慮や，旧病室に比べ格段に明るくなった病室の提供，患者さんへの検査等の説明窓口の集約化などと共に，診療における患者さんの意思を尊重するICの普遍化や意見箱等，患者さんからの要望・批判に迅速に対応する体制も強化され，本院の基本方針に掲げられている「患者さんの意思を尊重した安心・安全な医療の提供」が深化したことは慶ばしい。同年11月に関係各位にご臨席賜り，病院再整備完成記念式典を執り行ったことは記憶に新しいところであるが，恒例となった学生による夏期，クリスマスのコンサートやマジック大会なども引き続き行われており，患者の皆さんの心を少しでも潤す努力も忘れてはならない。

病院再整備記念式典（平成25年11月1日）

再整備事業が行われている最中の平成23年3月11日に起こった東北地方太平洋沖地震は，東海地震の発生が叫ばれて久しい地に病院を構える我々にとって，災害拠点病院としての役割を見直す事が否応なく求められることとなった。浜松医科大学附属病院としては，文部科学省からの要請により，福島県に放射線被ばく量測定のために放射線技師等5名を，東北大学医療支援班として石巻赤十字病院（宮城県）に救急部医師等4名の災害派遣医療チーム（DMAT）を派遣した。また，静岡県からはこころのケア活動の要請を受け，静岡県医療救護班として，岩手県宮古市内の避難所に精神科医師等3名を派遣するなど，地震発生5日後から12回に渡り，当院から医療チームを送るなどの支援を行った。その後も，静岡県による新東名高速道路SAへリポートを活用した航空進出訓練が行われた際にもDMAT隊員が参加し，東海地震等の大規模災害発生時に対応が出来るよう，研鑽を積んでいる。想定外という言葉を使うことはもはや許されない現状において，あらゆる状況を想定した災害対策の策定が急務であるが，これらの経験を踏まえつつ，平成25年6月，病院の実情にあった防災の定期的な見直しおよび病院独自の訓練の企画立案を検討する目的として，新たに防災チームが設置された。災害発生時の指揮系統の見直しやアクションカードの作成・運用など，既存の対策より1歩踏み込んだ対応方法が防災訓練実施の度に検討されていくことになる。また時期を同じく9月には，大規模災害に対する防災マニュアルの2回目の改訂が行われた。

防災訓練（平成25年10月15日）

最後に，本院の現状の課題及び将来展望について述べる。現在，病院が抱える課題には，臨床研修医を含む若手医師の育成，救急医療の強化，勤務医の負担軽減，産科病床数の不足などがある。また展望として，最新の医療機器の整備，魅力ある救急・総合診療機能の充実，女性医師･女性医療職への支援，地域包括ケアを意識した大学病院としての役割の推進などが上げられる。

平成16年度以降の臨床研修医数の動向を見てみると，マッチング数は年々減少しているが，浜松医科大学以外での研修後，大学に戻って更なる研修を積みたいと考える若手医師が一定数おり，入局者数としては安定した状態である。本院の基本方針である「社会･地域医療への貢献」「良質な医療人の育成」「高度な医療の追及」はいずれも密接に関連している。すなわち，本院は先進的かつ高度な医療を提供する使命があるが，このことは，極めて魅力的な研修内容を提供できることを意味し，良質な医療人の育成には必須といえる。そして多くの若手医師が大学病院に在籍し，高度な医療を実践しかつ専門医等の資格を取得することにより，社会・地域医療へ貢献できる質の高い医師の派遣等が可能になるものと考える。平成24年度からは，臨床実習生に対するスチューデントドクターの称号の授与，救急医療におけるファーストタッチについての短時間の集中的な講義などの取り組みが開始されたが，多くの卒業生が本学での初期研修を希望するように，各診療科が足並みを揃え，医療人としてのスタートに際し先進的な医療を経験できることの大切さと魅力を伝える必要がある。学生が医療行為を行うことに対する大学としての責務や姿勢を示すとともに，自覚とモチベーションを与え，大学病院で働くことに早い段階から関心が持てるような環境，プログラムの整備が必要である。また，大学附属病院としての活動力を高めるためには，女性医師・女性医療職への支援もまた必要不可欠である。女性医療人が働きやすい環境を整備することも急務と言える。いずれの課題も，スタッフ1人ひとりの問題認識と目標の共有が解決の鍵となることは言うまでも無い。

そして，本院の指針である「健全な経営」はこれまで述べたような大学病院としての使命を果たすためには不可欠といえる。質の高い医療と健全な経営という両輪を滞ることなく前進させたいものと考えている。10年後には開学50周年記念誌が発行され，同じように診療通史が掲載されることであろう。ここに記載した課題と将来展望がどれだけ達成されたのか，述べられるに違いない。病院としての一体感，まとまり力を発揮することにより，質の高い医療体制に裏打ちされた輝きに満ちた浜松医大附属病院を目指して新たな10年を歩みたい。

（今野弘之）